

## ストムップの情覺説

野上俊夫

### 七

以上ストムップは、彼れが特に論ぜんと豫約して置いた三つ(二七)のもの、中、痛みの感覺と快の感覺との二つについて、それが結局感覺に屬すべきものなることを論じたのであるが、彼れは更に進んで第三のもの、即ち特殊感官の感覺に結合する適不適の感情、例へば或る色、或る音、或る香ひや味などが愉快に思はれ又は不愉快に思はるゝ、その快不快の感じが、從來は何人にも感情であるとして疑はれなかつたものが、矢張り一種の感覺に外ならぬことを論ぜんとして居る。前述した痛覺は勿論、所謂快の感覺といふものも、大抵は他の心理學者も既に之れを感覺とするに於いて異論の無いものであるから、ストムップの論證も亦比較的容易であつたが、今論ぜんとする第三のものは、多くの心理學者が殆ど皆感情なりとするに一致して居たものであるから、ス

トゥムプの論證は極めて重要であると共に頗る困難であるべきは初めから期待せられ得る。

彼れは先づ刺戟の甚強き場合と、刺戟の中位なるか又は弱き場合とを區別して居る。第一に刺戟の極めて強き場合には、其の感官から生ずる特殊感覺の外に痛覺が加はり來るを常とする。此の痛覺は其の感官の感覺の新しい屬性では無くして、新に加はり來れる一つの感覺であることは勿論である。溫度感覺及び聽覺に於いては此の事は最も明瞭である。強度の熱又は寒に會つた時、又は皮膚を強く壓せられた時の痛みは、溫、冷又は壓の感覺に附け加はり來れる痛覺であることは何人も疑ひはずまい。皮膚は狭い部分に於いても尙ほその内に多くの感官を含んで居る。而して此等の感官の一つが、或る刺戟の強さが一定の度を超した時に興奮せしめられて痛覺を生ずるといふことは、たゞ目的論的に於いてのみならず、因果關係から云つても容易く理解され得る。例へばフン、フライの假説、即ち表皮中に末端器官を有せずして終つて居る神経は痛神經で、種々の末端器官を有するものは其の他の皮膚感覺を生ずるのだといふ考への如きは、此の點に大に役に立つと思はれる。或はよく注意して溫度點のみを刺戟する時は、人工的に強き熱の感覺(Hitzeempfindungen)を生ず

るけれども、此の時は決して痛の感覺を伴はないといふことをゴールドシャイデルが證明したことがある。強き光や音によりて刺戟された時に生ずる痛みも、その本質は皮膚の痛みと同じものである。即ち光や音の感覺が不快なものではなくして、此等の感覺に痛の感覺が附加し來り、之れによつて前に存在せる快の感覺が押し除けられるのである。

末梢的の強い刺戟によつて生じたる快の感覺についても亦同様の事が云はるゝ。此くの如くに、音や色や香やその他の感覺の刺戟の極めて強かつた場合に、此等の感覺が或は不快に或は快に思はるゝのは、此等の感覺に附加はつて第二の痛又は快の感覺が生ずるものとして説明し得らるゝが、刺戟の餘り強からざる場合には説明は稍困難となる。即ち此の如き場合には、不快も痛といふまでの強さに至ること少く、快も亦通常は餘り強くは無い。故に此等の感じを普通に適不適 (*Annehmlichkeit und Unnehmlichkeit*) と名け、この適不適の感は、香ひや色などに附加し來れる第二の感覺などではなくして、此等の感覺と本質的に結合して居るのであるやうに思はれる。花の香ひの快なるは、其の花の香ひの性質に屬して居るやうであり、硫化水素の臭氣の不快なるは、その臭氣の中に屬して居るやうに思はれる。即ち恰かも此の場合の

快不快は此等の感覺の一つの屬性であるかのやうに思はれぬでも無い。

併しながら、感情が感覺の一屬性なりとする考への到底不可能なることは既に説いた通りであるから、此の場合には矢張り快不快又は適不適の感じは、此等の感覺に附加して來れるものと考ふるより外はない。たゞ之れを感覺と別種なる感情といふものとするか、又は矢張り之れも一種の感情なりとするかの點が分るのである。

或は又此の場合と前の刺戟の甚強かつた場合と全然切離して考へ、強い刺戟の時には快又は痛といふ感覺が附加して、來たが、刺戟の強からざる場合の感覺に伴ふ不適の感は全然別種のものであると考へることも強ち不可能で無いかも知れぬ。

然れども更に進んで考ふれば、此等の場合に於ける適不適の感を矢張り一種の感覺なりとなし、極めて廣い意義に於ける共感覺 (Mitempfindung) なりと考へ、或は通常の末梢的に起る共感覺到對して、中樞的に起る共感覺なりと考ふれば、何も別に大なる困難がありとは思はれぬ。

たゞ此の考へに關して故障となることは、一つの色又は香ひなどの適不適の感は、其の色又は其の香ひを感ずるか或は之れを思ひ浮べるに非れば、此適不適の感のみを感じ又は思ひ浮べることは出來ないといふことにある。然るに普通の共感覺は、

充分の練習と注意の集中とが、ありさへすれば、そのみを思ひ浮べることは少くも出来るものである。

此の點に關して最も大切なることは、その適不適のみを別々に感ずるといふことよりも、むしろそれのみを別に思ひ浮べるといふ點に存する。何となれば此の適不適を別々に感じ得ないいふことは、少しもそれが感覺であるといふとに反對する強い議論とはならないからである。例へば(一)或る香ひに伴ふ適不適の感は、吾人の感官などの解剖學的構造上、香ひの感じをも共に生ずるに非れば獨立して生じ得ざるやうになつて居るのかも知れぬ。皮膚感覺中の痛覺の如きも、以前は矢張り他の感覺に伴うてのみ起るものと思はれて居たが、漸く最近に痛覺のみ獨立して生じ得ることが知らるゝに至つた。故に將來に至らば、我々の所謂情覺のみが、他の感覺と獨立に、末梢的方法によりて生ずるやうにならぬとも限らぬからである。或は又(二)香味、色などの特殊感覺と、之に伴ふ情覺との間には、極めて密接なる融合關係が存立すること、恰かも味覺と嗅覺との融合の如く、又一音と其のオクターヴの音との融合の如きものがあるとも考へられぬことは無い。或は又(三)最も可能らしいと思はるゝことは、特殊感覺に伴ふ情覺は中樞的の共感覺で、末梢的の刺戟を變化せしめても

之れに影響を及ぼすことが出来ないのであるとも考へらるゝ。若し然りとすれば、皮膚の場合に於ける如く、外部よりの刺戟によつて此の二つの感覺を相分つことは出来得なくなり、若し此の兩者を強ひて分たうとするならば、中樞的條件の變化によりてするの外はなくなつて來る。

(一七) 哲學研究 第二十五號 三七頁

## 八

右の次第故、情覺のみを別に感覺として感じ得ないといふことは左程重要なる事柄では無くなり我々の前に横はる困難は、此の感覺感情が、そのみ別々に思ひ浮べられ得ないといふ點に於いて、他の感覺と著しい差があるといふ事に歸着する。

然るに此の感覺感情が、そのみ別に思ひ浮べられないといふこと、例へば音又は色の感覺と之れに伴ふ感覺感情とが別々に考へ得られぬといふことは、音や色の感覺と之に伴ふ感覺感情とが平生常に相伴うて居り、之れか習慣とななつて終つた爲めであるとして説明し得られぬことは無い。之れは或る種の感覺相互の中に於いても見らるゝことである。例へば香ひを心に思ひ浮べ得る人は、通常必ず之に伴う

て其の香ひを發する物體の視覺表象を有する。ストゥムプ自身もヘリオトロップの臭をとく思ひ浮べることは出来るが、此時矢張り其の花の視覺表象を有するを必要とする。然らば必ずしも感覺感情のみが之に伴ふ感覺を獨立に思ひ浮べられ得ない一種特別のものであるといふことも出来ないであらう。

次ぎに注意すべきは、あまり強からざる孤立せる色又は音に伴ふ適不適の感はその音や色を實際に感じた時に於いても尙ほ頗る弱いのが常である。例へば或る一つの色と他の色とを比較して、いづれがより多く快なるか又は不快なるかを判斷することは甚困難である。勿論特別の場合には、或る一つの音又は色が特別に強い快感を生ずるといふ事は有らう。そしてそれには其の瞬間の神經の状態又は其の個人の心身の構造が關係するであらう。併しながら大體から云ふと、或る色(灰色をも含めて)或る音(躁音をも含めて)から生ずる純粹の感覺感情といふものは極めて弱い。随つて此くの如く弱い感覺感情のみが獨立して思ひ浮べられないことも寧ろ當然とも考へらるゝ。

多くの音又は色の同時に結合した場合には之れに伴ふ感覺感情は稍強くなる。又味覺と嗅覺とに伴ふ感覺感情は、味覺嗅覺自身があまり強からぬ時でも更に一層

強い。併し此の場合には、此の感覺感情のみを取り離して思ひ浮べ得ないかどうか  
が頗る不確になつて來る。ナーゲルは嗅覺をよく研究した人であるが、嗅覺を心  
中に思ひ浮ぶることは全く不可能で、反對に、嗅覺に伴ふ快不快の情は容易く思ひ浮  
べ得ると云つて居る。同様に味覺に於いても、例へば牡蠣の非常に好きな人は、たゞ  
牡蠣を見たのみで、或はその名を聞いたゞけで、恰かも之れを食べたと同じやうな快  
感が生ずることがあるであらう。或は又美術家は、色の無い或る繪を見ても、色に伴  
ふ感情を感じることが有るであらう。

或は反對なる人はいふかも知れぬ。之れは普通に多くある所の感情移轉の場合  
に過ぎぬ。之れは感覺無しに感覺感情の存立し得ることを示すもので無く、たゞ或  
る一つの感覺に感情の附着して居たものが他の感覺の上に移轉したものとるに過  
ぎない。例へば初めて或る聽覺に感情が附着して居たものが、視覺に附着するに至  
り、視覺よりして更に或る言葉に附着するに至つたのであると。

併しながら此くの如き事をいふ人は抑何事を期待するのであるか。情覺表象が  
再生の動機となるべきものを有せずして、他と何等の關係無くして意識中に再生す  
ることを望むのであらうか。或は又其の情覺が最初に結合して居た所の音や色と



離れて意識に再現されるのを望むべきであらうか。云ふ迄も無く後の場合で無ければならぬ。前の場合は通常の感覺の場合にも悉くありとは學者間に考へられて居らず、又それが若し有れば幾分普通以外の場合と見るべきであるからである。後の場合即ち感情が其の最初に附着して居たものから他のものに移轉し得るといふとが、即ち其れが他の一般の感覺的表象と同じ種類のものであることを證するに足る。即ちそれは短縮再生の一例たるに過ぎぬ。例へば *hensa* といふ字が羅甸語の『机』といふ字であることを始めて教はつた時は、此の字を見れば始めに『机』といふ字を思出し、それから實物の机の視覺表象を思ひ浮べるのであるが、それが次第に馴れて來ると、*hensa* といふ字を見れば直ちに机の視覺表象を思ひ浮べるやうになるが如く、初の中は或る樂譜を見て、その音を思ひ出し、次ぎに其の音に伴ふ感情を思ひ出して居たのが、次第に其の樂譜を見て直ちに其の音に伴ふ感情を思ひ出すやうになるのである。即ち感情が一つより他のものに移轉するといふことは、即ち感情が意識の内に獨立し得る性質を有する證據となり、それが他の感覺表象と同一種たることを示すものである。

## 九

反對するものは或はいふかも知れぬ。感情の再生の機會 (reproduzierender Anlass) となるものと感情の基礎又は内在的條件 (unterlage oder immanente Bedingungen) とは同一でない。樂譜を見て音を思ひ浮べずに其の生ずる感情のみを思ひ浮べた場合には、樂譜はたゞ感情の再生の機會のみならずして、亦感情の基礎となして居る。牡蠣を見ただのみで之を食べた時の快を生ずる場合なども同様である。即ち此の場合には單に二つの表象が聯合したといふ位のことと無くして、更に深い關係が兩者の間にある。即ち新しい感覺は前の感覺と同様に其の感情の所有者 (Träger) である。即ち感情には常に感覺若しくは表象があつて之れが所有者たるを要するが感覺は反對にたゞそれのみ思ひ浮べらるゝを得、其の最初にたゞ再生の動機たるものがありさへすればよい。即ち此點に於いて感覺と感情との間に著しい差別がある。若し音に伴ふ感情が音の感覺と同様に一つの感覺であつたならば、何も別に樂譜の視覺表象が所有者として生ぜずとも、何か言葉で命令を發するか、或は自ら意志決定をなすことによつて Dur なら Dur の音に伴ふ感情を生じ得べきでは無いか。然るに此事は

不可能である云々。

此の反對に對してストゥムプは次ぎの如くに答へて居る。即ち第一に若し樂譜が感情の所有者となるならば、何故に「目」といふ言葉も同様に其の所有者となり得ないであらうか。實際或る言葉のみを與へて之れに相應する感情を生じたる場合は、決して無いでは無い(ストゥムプはリボーやエルゼンハンスの擧げた例を引いて居る)然れども更に進んで考へると、此の論者の所謂感情の再生の動機といふこと、感情の所有者又は内在的條件といふものとの間の區別が頗る不明瞭になつて來る。例へば樂譜や、牡蠣の視覺觀念が感情の内在的條件となるといふことは如何なる意味であるか。

内在的條件といふことは、或る對象を有する高等なる感情については之れを云ひ得る。或る人が兒の生れたのを大に喜ぶといふ時に、此の喜びの情は決して他の任意の對象、例へば地震といふ如きものに移轉せしむることは出來ぬ。即ち此の喜びを其の對象と取り離して思ひ浮べることは出來ぬ。或は美的の事項に於いても、眞の美的感情は其の對象と不可分的に結合して居る。美しき文章、巧みなる製作を見た時の快、又は醜惡なるものを見たる時の不快は、決して例へば音より樂譜に、色より

して無彩色畫に移行するものには非ずして、初より抽象的の關係に結合してあつたもので、初に吾人は實際の音を聞いて其の中から此の關係を聞き出したものが、後には樂譜と見てその中から之れを目で見出したのである。或は初めに彩色畫の中に見出し、後には無彩色畫の中に見出すのである。即ち此の場合の美的效果は、たゞ一つのものから他のものに感情が移轉したのでは無く、意識の間に現實に知覺せられ存在する關係が、其の對象、其の内在的條件となつて居るのである。

然るに吾人の茲に論ぜんとするのは、美的の高等感情では無くして、單に感覺的の適不適に就いてある。此の適不適と、之れを生ぜしむる感覺との間には、ストゥムプの考へによれば、單に同時に存在するといふことの外に何等の心理的關係は無い。それ故に感情が一方から他方に移行するなどいふことが生理的にも心理的にも容易く考へ得らるのである。即ち或る高等感情又は情緒の如きものの場合と、單なる感情的の適不適といふものとを意識の内て相對せしめて考へるならば、兩者の間に此の關係に就いて差のあることを明に認めねばならぬ。かく見來れば、さきに感情の移轉が短縮再生の一つの場合なりとした吾人の考へが、たゞに可能なるのみならず亦正しいことが解せられやう。而して亦之れによつて吾人が主として證明

せんとして居る情覺の獨立性といふことも亦認められ得るのである。

## 10

此の情覺の獨立性について尙ほ全く十分であると思はれぬ唯一の點は、初めに吾人が議論を始めた事實、即ち香ひや音や色などの適不適の感を、此等の感覺又はその記憶心象なくして、意識に思ひ浮べ得るかといふことにある。前にも述べたやうに、ナイゲルは、嗅覺を思ひ出さずとも、之れに伴ふ快感のみを思ひ浮べ得るが、之れはやはり何等かの聯想の媒介を借りてするのである。例へば彼れはタールチンの香ひを思ひ浮べずとも、此の香ひに伴ふ快感を思ひ出し得るが、併しそれは以前になしたる航海の經驗が其の原因をなして居る。即ち此の場合は簡單なる情覺にあらずしてむしろ氣分 (Stimmung) である。或は嗅覺に伴ふ不快の場合にも矢張り他の感覺が之に伴うて居る。例へばアムモニアの臭氣の不快を思出すやうな場合には、其の刺すが如き感覺が再生されるのである。故に此の時も亦情覺のみが孤立して起つたのでは無い。兎に角此くの如き場合の内省は實に困難であるから、此の點については尙ほ他の人々の多くの内省をも得ねばならぬ。

此點に關してストゥムプは自己の最も得意とする音樂の方面から實例をあげて居る。即ち彼れは或る拙劣なる樂譜を見れば、たとひ其の傍で話しをしたり又は他の音樂を演奏して居て、彼れの見て居る樂譜を聽覺的に表象することが非常に困難であるやうな場合でも、彼れは直ちに其の見たばかりの樂譜に伴ふ不快の感情を感じずる。勿論實際にその音を聞いた時に比すれば其の情は稍弱くはあるが、併しそれは明かに起るのである。ストゥムプは以前は此れは單に抽象的に其の樂譜の良否を知ることには過ぎないのだと思つて居たが、今は之れが確に感覺的の適又は不適なることを信ずるに至つた。ストゥムプ以外にも之れと同様の考へを有して居るものがある。例へばドクトル、アブラハム及びドクトル、フォン、ホルンボステル等は、或る音樂例へばダンホイゼルの順禮者の合唱の或る一部の如何にしても思ひ出せない時に、始めに此の部分に特有なる感情が先づ現はれて、之れを便りとして樂譜そのものが思ひ出される場合のあることを擧げて居る。或る定つた樂器の音色に結合せる感情の作用を思ひ出すとき、又は個々の樂器相互間の感情の差別を思ひ出す時にも、矢張り同様であつて、必ずしも其の音色そのものを聽覺的に思ひ出さずとも、その感情の作用は、思ひ浮べ得るのである。

併しながらストゥムプは、以上に述べた事が悉く明白なる事實として疑ふ可からずとまで直ちに斷言はせない。尙ほ幾分の疑ひを残して置くと云つて居る。何となれば、此等の場合の中、音の表象が餘り著しからぬ時には、感覺感情も亦多くは甚だ不明瞭であり、反對に、感情が強くあらはるゝ時には、音の表象も亦意識に明かにあらはれるからである。種々の感覺の方面から此の事に關して疑ひを容れないやうな例を得るには、尙ほ多くの時を要するであらう。

此の點に關して大切な問題は、有らゆる感覺的の快感及び不快感適及び不適は、各、同じ種類のものであらうか。即ち温の感覺又は寒の感覺が各同じ種類のものなるが如きであらうか。或は又快又は不快といふのは二つの大きい種類の名で、その各の内に多數の異なる感情の性質を含んで居るのであらうか。我々は今は此の問題に立ち入らぬが、若しキユルベと同じく、有らゆる快と有らゆる不快とは各同一性質のものであるとするならば、當然の結果として、感情の性質は其れが平生伴うて起る所の感覺と何等の關係の無い事となるであらう。且又苦しさうだとすれば、情覺は現實の感覺にあらはれた時にも、亦表象として思ひ浮べられた時にも、共に一般に別々に獨立せしめらるゝ事となるであらう。

一一

若し假りに百歩を譲つて、此の情覺の獨立性を證明することが不可能であつた時、即ち餘り強からざる溫度、味、臭氣、音色等に伴ふ感覺感情を、そのみ取り離して思ひ浮べ得なかつたと假定した時には、感覺感情は普通の感覺とは全く相異つて居る精神要素なりと見なさねばならぬであらうか。

曰く否。若しさうなつた場合にも尙ほ之を附加的の感覺 (Annexe Sinnesempfindung) なりと見なせば宜い。たゞ生理的の或る特殊の中樞的構造が有つて、その爲めに二つを明かに分つことを妨げるのであるとすべきである。特に音、香ひ、色等に伴ふ快感が夫れ夫れ相互に異なりと考ふる時には、此事は殊に然りと思はるゝ。即ち例へばスペクトラムを見た時の快のみをスペクトラムから特に離して思ひ出すことの困難なる理由は直ちに理解さるゝであらう。恐らくは此くの如き場合の作用は、最初に視覺中樞に起り、其の後に始めて我々に快として感ぜらるゝ、第二の興奮が起るといふ風に考へ得らるゝであらう。此の快なる感じに伴ふ所の中樞作用は特に腦の何れの部分に起るといふことなく、灰白質全體に起ると考へることも出来るであら



うし、或は又視覚中樞そのものゝ中に起るとも考へらるゝであらう。此くの如き構造を有して居るから種々なる種類の感覺に結合して居る情覺は夫れ／＼相異つた特殊の色彩を有して居るかも知れぬ。併し何れの場合に於いても彼等は依然として共感覺に過ぎないので、決してその爲めに、特殊感官を餘り強からざる刺戟にて興奮せしめた時の感覺に伴ふ適不適の感情が、全く感覺と相異れる精神要素なりと考ふべきでは無し。

以上の事から考へて、ストゥムプは次きの如き結論を下して居る。曰く從來感覺感情と名けられ、又は感覺の情調と名けられて居たものは、結局一種の感覺なるに外ならぬ。之れは意識の狀態的部分 (Zuständlicher Teil) に屬せずして、その實質的部分 (Gegenständlicher Teil) に屬する。意識の機能 (Funktion) ではなくして其の實質 (Material) であること、色や音や香ひなど、同じ事である。

或は此の情覺が結局他の感覺と同じ種類に屬するといふことを承認しても、而かも情覺には他の感覺に存在しない或る種の特質を有して居るといふ點から、情覺を矢張り一種の感覺なりとすることを許す人でも、其の感覺といふものを大別して二つとなして、一つを情覺、他の一つを其の他の從來の所謂感覺なりとする方がよいと

考へる人もあらうが、ストムプは此の見方にも明かに反對して居る。なるほど情覺にはそれ特有の性質はあるが之れを同様に他の感覺にも亦それ／＼自己にのみ特有なる性質がある。苦痛の感覺のみが痛といふ性質を有し、快の感覺のみが氣持よいといふ性質を有して居る事は事實であるが、併し音の感覺のみが音の性質を有して、他の感覺は皆沈黙して居るから、此の點から有らゆる感覺を音と他の諸感覺といふ風に分ける事も出来る筈である。或は嗅覺のみが香ひを有するから、嗅覺と他の有らゆる感覺とを對せしむることも出来ることになるであらう。

或は、他の感覺は皆知的の性質を有し、情覺は感情的の性質を有するから、兩者相異るといふ人もある。之れは或る點までは事實である。『情覺』といふ名を附けたのも其の爲めである。併しながら、第一に、此の差別は決して感覺の性質そのものに關する記述的の差異ではなく、それが心的結合の中に有する効果の差である。第二に、此の區別は決して判然たる區別で無い。例へば筋覺又は溫覺なども種々の感情の中に常に含まれ、又はその結果として生じ、之れに重要な關係を有して居るからである。

既にペインは之れと同じやうな見方からして筋肉感覺を他の有らゆる感覺と對

立せしめ、之れを活動感覺と名づけた。併しながら、それはたゞ筋覺が外部意志動作と特に密接に關係して居り、又心理學者が筋覺の事を考へる時に、此の事實が多くは其の心の中に浮んで來るといふ意味に過ぎない。純粹なる感覺として見れば、筋覺はそれ自身に何等活動を示して居らぬことは他の感覺と少しも差は無い。又不隨意に起る種々の運動、例へば反對運動、又は電流の刺戟の結果として起り得るのである。筋覺の活動的性質に於ける關係は、恰かも情覺の感情的性質に於けると同様である。

## 一一一

以上を以て、大體ストゥムプの議論は終つたのであるが、彼れは更に『應用』なる一節を設けて、彼れの議論の實際上の効果を検査して居る。有らゆる分類の問題に於けると同様に、此の感覺と感情との關係に於いても、決して分類そのものに重大なる意義があるのでなく、其の結果の方が、大切なのである。即ち如何に分類した方が、種々の事實を最も無理少く、又簡単に配列し得るか、又多くの補助假説を要せずして、此等の事實を因果關係に纏め得るか、といふことが重要なのである。ストゥムプの感情に



痛みが感覺とは全く別種の状態なりとすれば、感覺の此の一屬性のみが根本的に消失すること又は感情といふ精神的根本機能が消失して意識の一般的構造が變化せらるゝ事が全く解せらるゝことは出來なくなる。勿論痛覺脱失の起る一々の場合は別に説明せられねばならぬが、此の現象そのものゝ一般的説明は、此くの如くにすれば極めて容易に出來るのである。

之れと正反對の場合、即ち痛覺が残存して、他の感覺の消失する場合も亦同様に説明せらるゝ。

感覺と感情との時間上の差異、特に多く問題となれる痛覺傳導の遅きことの説明も亦此の考へによれば何の困難も無くなる。

何等の感情を生ぜざる感覺 (indifferenten Empfindungen) の問題は、今までの考へ方では常に無理があつた。即ち實際に感情が存在しないやうな時でも、やはりそれが有るのだと假定しなければならなかつた。即ち若し感情を以て感覺の一つの屬性なりとするか、或は有らゆる感情に必ず附隨し來る精神要素であるとするれば、殆ど先天的に、有らゆる感覺は皆感情を伴はねばならぬこゝなる。然れども、我々の見解をとつて、所謂感情はたゞ一つの共感覺に過ぎずとすれば、必ずしも此の共感覺が常に他の

感覺に伴うて來なければならぬ理由は無くなる。併しながら亦一方から見ると、情覺の有する生物學的機能から考へると、此の感覺の器官が身體全部に亘つて分布されて居なければならず、随つて稍強く又擴がり居る刺戟には、大抵の場合には情覺が伴つて來るべきも亦理解し得らるゝ。

明知せられざる (unmerkliche) 痛及び快のあることも、此の見方からは容易く説明し得らるゝ。一般情覺は、他の感覺よりも強く意識に入り來るものであるが、而も屢、輕き痛みが長い時間餘り判然とあらはれず、よく注意して後に始めて或る痛みがあつたのであることが、明かに知らるゝやうなことがある。同様なことは他の感覺にも多々ある。今までの見方では此れは頗る困難なる問題であつたのである。

次ぎに情調が感覺の質に依繋すること (Abhängigkeit der Gefühlstone von der Empfindungsqualität) も此説によりて容易に説かれる。ヘンリッグハウスが説いたやうに、一定の感覺があれば之れに一定の感情が伴ふことは、頗る廣い範圍に亘つて定まつて居るが、一方に於いては此の例外なる場合も少からずある。故に多くの心理學者のなしたやうに、感情を單に感覺の函數なりとすることは出來ない。感情自身が獨立せる生理的條件を有せねばならぬ。併し此の生理的條件は、一方に於いては其の結合せ

る感覺の生理的條件と平行せねばならぬ。然るに感覺感情を共感覺なりと見れば、此の點が故障なく説明され、感情の生理的發生的説明の有用なる根據となることが出来る。

### 三

最後に未決の大問題、即ち感覺感情の個人的及び種族的進化の問題、及び之れに關聯して、同じ刺戟を與へても、之れによつて生ずる感情に著しい差異のあることが、吾人の見方から云ふと、幾分解決の見込がつくのである。

『甘い』『軟い』『暖い』等の語は明かに愉快なる情調を伴ふが、併しその本來は、情覺とは何等の關係の無い感覺の名である。併し此等の感覺は、兒童に對しては一般に快の共感覺を伴ひ、隨つて快の聯想が之れに附着したのである。併し實際は成人にとつては、快の共感覺は他の感覺、苦鹹、粗、冷、寒等に移轉し、初めに快なりし甘、軟、暖などは時として不快になつて居ることはある。何故にかゝる變化が起り、それが如何にして起るかは目下の所分らぬが、他の場合に、個人の生涯に於いて得たる特異の性質については、其の由來を知り得ることが屢ある。或る食物が甚だ不味く出來て居て、そ

の爲めに嘔吐の情覺を生じたことがあれば其の後此くの如き食物を見れば直ちに此の情覺が起り、それが直ちに現實の感覺に變化する<sup>(一八)</sup>。故に嘔吐は其の食物の視覺に對して共感覺として伴ひ來る。此くの如きものが遺傳によりて種々の人に種々の特殊な好惡を感ぜしむるに至るであらう。

此の感覺感情の進化に關して最も多くの材料を與へるものは音の感覺である。

此事に關しては、歴史的、個人的、又は土俗學的の多くの事實が既に知られて居り、最近に蓄音器を用ひて、外國の音樂を研究することが始まつてから、殊に多くの事實が集まるやうになつたが、感情の實驗的研究も亦此點に役立つ所が多い。協和的なる二音に於いて『純粹の感情』(Reinheitserfüllt)の存在すること、及びそれが特殊の關係を有すること、此感情が美的その他の他の動機によつて或る範圍内に於いて變化すること、されども亦此感情が前に作られたる習慣に影響せらるゝこと、一般に協和音の快感に關して大なる永久的變化あつたこと、近代の調和音の感じの起り及びその發達したこと、又一時他の構造の音を多く聞いて居ると、一時この調和の感じの無くなることあること等の多くの事實は即ち感覺感情の進化を説明すべき重要な事實である。吾人若し高等感覺に於いて中度の強さの刺激から生ずる感覺に伴ふ感情を中樞



的の共感覺なりと解すれば、此等の事實も容易に理解し得らるゝ。即ち此等の感情が、或る短い時間の間に於いては、同じ刺激から同じ感情が生ずるけれども、長時間の内には、個人的又は種族的の變形を生じ、殊に種々の精神作用注意の方向、判断の仕方一般の習慣現象の影響を受け、此等の影響が數代に亘つて積聚すれば遂には遺傳的の性質のものとなつてしまふのである。例へば種々の協和音に伴ふ感情の如きは、大部分は始めには種々の情緒に伴うて生じたる情覺の残りであつたものが今日では此等の情緒なしに直接に感覺に結合して來るのである。けれども其音を長く聞いて居れば本來の情緒が再び生じて來ることがある。此の點は頗る重要なることである。此の數世紀間に内包的感覺感情の驚くべき發達をなしたること、調和音の快感について、異なる個人間及び種族間に於いて大なる差異のあること等は、たゞ此くの如き見方によつてのみ理解し得らるゝのである。リズム及び空間的圖形の純感覺的なる感情作用も亦同様に説明せられ得るであらう。即ち此の場合にも、やはり、知的作用(比較、綜合など)に基く高等感情の外に、純感覺的なる適不適の感覺があつて、此等の感覺が亦協和音の快感と同様に、個人的及種族的の進化をなすべき動搖的の要素を結合して居る。此場合にもやはり個人間及び種族間に大なる差があり、

感覺の極めて鋭い人もあれば、亦極めて鈍い人もある。此等も亦中樞的共感覺の考へによりて説明せられねばならぬ。

勿論、決して有らゆる情覺が、此くの如くにして説明せらるべしといふのでは無い。此くの如き可變的情覺の外に、其の瞬間に作用して居る刺戟と密關してかなり一定して居る情覺もある。例へば *Die* の三音の如きは、何等音樂上の素養の無き民族にも快なりと思はるゝが如き是れである。此等は上の如き説明を施すこと不可能であるが、併し此くの如く刺戟と直接に關係して居る情覺は、少くも視覺及び聽覺に於いては頗る弱くして、精神生活に大なる影響が無い。

従來は香ひや、味や、音や、色などによりて快感を生ずることを説明するのに悉く目的論的の考へを以てした。即ち快なる感覺は、其の刺戟されて居る神經か、又はその生物全體か、又は其の生物の屬して居る種族全體かにとりて、有益なるものであると考へられた。而して發生的に之れを理解せんが爲めに即ち目的論を因果關係となさんが爲めには、通常外界への適應といふ原理を持ち來つた。此くの如き目的論的原理及び適應の考へは、多くの場合に於いては事實に基いて居る。併しながら此の考へが極めて漠然として居ることは暫く恕するとして、之れを高等感覺の情覺に

應用するに當りては頗る困難を感ずる。薔薇の香ひが神經か個人か種族かに有益であるかは何人も證明し得まい。又は蒜の臭氣の嫌ひな人にとつてはその臭氣が有害であるか、或る音の結合又は色の結合は有益で、他のものは有害であるかといふやうなことも證明することは六かしからう。勿論想像することは出来るが、證明することは出来ない。ヘルムホルツは不調和の音の不快なるは刺戟が、斷續的に來る爲だとして幾分此の種の説明を試みやうとしたが、之れも結局如何はしく、又調和音の快なることの説明はなし得られなかつた。或は互に補色をなす二色の結合が快なのは、此の二色が互に相高め合ふからだと言いたものもあつたが、其の誤りなることば、恰かも互に補色をなす二色が最も快なるものには非ることによつて知らるゝ。

此等の事に關して種々の假説は如何にでも作り得らるゝ。併しながら、若し感覺感情を感覺なりと見なせば、吾人は此の假説を作るのに、從來吾人が他の多くの感覺及びその記憶心像について、一般に有して居た有らゆる知識を利用し得らるゝのである。此等の問題を解き、感覺感情の力學を建設し得たならば、その他の事は容易に解決し得らるゝであらう。

## 一四

以上、ストンプの情覺説の大要を紹介したのであるが、最後に此の考へに關する自分の所見を簡單に附加して見やう。

彼れの考へに於いて、直ちに首肯し難いやうに思はるゝ點は決して少くは無い。第一に彼れが所謂情覺に屬するものとして、擧げて居る三種類の中、最初の痛覺は、今日何人と雖も其の感覺たることを疑ふものがないのであるから、彼れが之れを感覺なりとして力説して居るのは、聊かなきに矢を放てるの感がある。次ぎに彼れは痛覺と、不快の感とを同一視して居るやうに見えるが、之れ古い時代の心理學者中に間々あつた見方で、今の心理學者には極めて少い考へ方であり、又實際頗る同意し兼ねる考へ方である。普通に痛みは不快を伴ふことが多いが、その時は明かに痛みと不快との二つのものがあることは、少しく内省すれば直ちに知り得らるゝことである。勿論此の二つは密接に結合して居ることが多いけれども、それも音や色の感覺を之れに伴ふ快の感との結合と同じ位のもので、ストンプの考へ方にすれば、此の

際の不快は痛の共感覺といふべきであらうが、兎に角此の二つのものが相異なるものたることは認めねばなるまいと思はれる。

次ぎに彼れが感覺感情に屬するとして數へて居るもの、第二のもの即ち快感の中に數へたるもの、内にも、今日の多くの心理學者が感覺なりとみなすに於いて異議の無いものが多い。即ち癢痒、癢笑及び肉慾の感覺、或は飽滿、休息の感の如きはこれである。全身快感は以上のもの程明瞭では無いが、併し或る心理學者は矢張り之れを感覺として居るものもある。但しこれは所謂感情の内に屬せしめてもよい程普通の感覺といふものとは、遠ざかつて居るものであるから、ストゥムプが之れを飽滿、休息その他のものと一括して快の感覺と名けたのは、感情と感情との區別を否定して居る彼れにとつては當然の仕方だ、此の點は頗る卓見であると思はれる。

第三の他の特殊感官の感覺に伴ふ快不快(適不適)の感が矢張り感覺に外ならぬことを證明せんとする所では、ストゥムプの議論は餘り明快なることは出来なかつた。若し之れを感覺なりとすれば、色や音の感覺を伴はずして、之れに附着せる感覺感情のみが獨立してあらはるべきであるといふ考へに對して、何等かの答へを得んとし、頗る苦心して居るが、結局此等の感覺感情が獨立して感覺となりてあらはれ、或は

獨立して思ひ浮べらるゝことがたとひ不可能なりとしても、之れを以て中樞的共感覺なりと見なせば差支へないといふ風に論じて行つて居るので、一見すれば、自分の立場を固く守ることが出来なくて、一步一步反對者に讓歩してやつたやうな形がある。特に前の第一第二の痛覺及び快感は、何人にも感覺たることの疑ひを容れないやうなもので、從來何人も感情なりと認めて居た所の此の第三の事實を論ずる時に、ストゥムプの議論が此くの如く稍明快を缺くことは、頗る遺憾の思なき能はずである。併しながら、更に他の一方より考へる時は、假りにストゥムプの議論の後半、即ち從來の感情と見なされて居たものが、結局感覺に外ならないことを證明せんとした積極的の部分が、幾分明快と徹底とを缺く點はあつたとしても、彼れの論議の前半、即ち感覺と感情との區別として從來の學者に明なりと考へられて居たことが、よく吟味すれば到底取るに足らざるものであることを説破した、消極的の部分だけで、彼れの議論の價値は十分にあると思ふ。若し此の部分が充分に證明されて、兩者の間に明かなる區別の標徴の無きことが知られたとすれば、ストゥムプの考ふるやうに、此の兩者を共に感覺なりといふより外に致し方はあるまい。併かも多くの感覺の中には、それ／＼種々の差異があつて、視覺、聽覺、味覺等の名を有するが如く、感情にも亦他の感

覺に見ない所の特殊の性質を有して居ることは明かであるから、此の點でこれを情覺と名けるといふ彼れの考へは極めて妥當であると思ふ。

更に進んで考ふれば、彼れの議論の積極的方面も、決して一見して感ぜらるゝが如く不明瞭なるものでは無い。此の方面の中核たる特殊感官の感覺に伴ふ感覺感情の議論の如きも、其の議論が稍明晰を缺くるやうに見えるのは、主としてストゥムプが、彼れ自身最初に斷つて置いたやうに、その議論は徹頭徹尾記述的方面に止めて、決して生理的解剖的假説には入らないと云つたのに反して、中樞的の共感覺といふ如き、稍生理的解剖的なる考へを容れて來たから起つたものである。之をたゞ純然たる内省上の問題として見るに止めたならば、彼れの立場は今少し明晰で堅固であるやうに見えるのであらうと思ふ。

## 一五

之れを要するに、ストゥムプの情覺の考へは、感覺と感情との區別如何が問題になつて來た時代のかかなり早き時期に於いて試みられた一つの説であるから、其詳細な點に於いては、未だ十分ならざる點もあるが、併し從來の心理學者の一般に有して居た

獨斷を打破し、感情は結局感覺と區別することの極めて困難なるものであることを唱説した點に於いて、心理學上慥に一時期を作るべき議論であると思ふ。

此の點に關してはストゥムプの議論に對して大體反對の態度を取つて居るテイツチナ<sup>(一九)</sup>すら、結局は左の如くいはざるを得なくなつたことなどは、頗る興味あることであると思ふ。

『意識の材料、即心を形づくつて居る所の素材が結局の所は等質のものであると假定するのは自然である。かくの如く假定すれば、感情は未だ進化せざる感覺(undeveloped sensations)とはさひ度くはないが、——何となれば未だ進化せざる感覺といふは、結局一種の感覺であるから——併しとに角感覺と同じ種類の精神作用であり、而して都合よき條件が起れば進化して感覺となり得る所の精神作用であると思はれる。加之若し試みに大膽に感情の『末梢器官』を想像して見るならば、それは身體の種々の組織に分布されたる求心的神經末端であらう。而して此れ等の末端は特殊の感官に比して進化の低い階段にあるものであると思はれる。感情作用の末梢器官はあるが、狹義に於ける感官は無いのは之れが爲めであらう。若しも精神的進化が更に進んだならば快と不快とは感覺となるかも知れぬ。恐く



は此の兩者共に更に分化して各多數の感覺となるであらう。若し各人の身體的進化が更に進んだならば、内部的感覺は之れに應じて増加するであらう。』

此の考へは極めて面白い。自分も全く同感である。然るに此くの如く考へるティツチナーの立場は、結局ストゥムプの立場と同じことなのではなからうか。此くの如き考へを有しつゝ、しかも感覺と感情とを明なる二つのものとして分たうといふのは極めて困難なのでは無からうか。ティツチナーは兩者の區別する特徴を六つ數へて、その内の四つは取るに足らぬとして之れを退けたが、<sup>(10)</sup>残りの二つ、即ち感覺は差異の間に動くのに、感情は反對の間に動くといふこと、感情が明晰を缺くといふ二點を以て、感覺との區別が出来るものと考へて居る。就中、明晰を缺くといふことを大切なる性質とし、感情はつまり進化の停止された感覺の如きもので、その末端器官は身體の各部に廣く擴がつて居るから、それが一度に興奮しても、明かなる意識には現はれ得ないのであるといふやうに説明して居る。<sup>(11)</sup>併し此くの如き生理的の假説はこゝでは暫く措き、大體に於いては賛成であるが、純内省上の事實として考へて見ると、前にも一寸述べたやうに、これが果して兩者を區別するだけの明なる區別か否かは稍疑はしい。それは所謂感覺といふものゝ中にも亦其の性質上明晰に意識の上

にあらはるゝことの困難なるものが少くない。種々の有機感覺の如きが是れである。ストムプが感覺感情の第二種とした快感の内に、癢痒癢笑等と共に、全身快感といふのを數へて居るが、前者は普通に感覺として殆ど何人にも疑はれぬが、後者はまだそれ程明かに感覺なりと斷言することも困難のやうに思はれ、而かも此の二つとも大體同一の種類に屬すべきことも疑ひはない。然れば假りに明晰といふことを感覺と感情との區別の一つの標準なりと許した所で、實際その標準に照して見て、兩者のいづれに屬するか、の明ならざるやうなものが多く出て來べきは當然で、結局此の兩者の間には判然たる境界が無いといふことになりはせぬかと思はるゝのである。

更に進んで考ふれば、よし假りにテイチナーの二つの標準を許したとしても、ストムプのいふ通り、種々の感覺相互の間にも若干の區別の特徴は存して居るのであるから、此の二つの標準が特に他のものよりも重要で、此の二つの標準によつて先づ感覺と感情とを分ち、次に次に感覺といふものを視覺、聽覺、味覺等に細別するといふほどの値のあるものか否かはまだ明かでないといはねばなるまい。此の邊のことは尙ほ將來の學者の研究に俟つ所が多いであらう。(完結)

(109) E. B. Titchener. *Ps. of Feeling and Attention*, pp. 491—

(110) *op. cit.* pp. 33.—

(111) *op. cit.* pp. 292.—